

己が志

西 村 理

奨励者紹介[にしむら・おさむ]

同志社大学名誉教授

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

(マタイによる福音書 5章43—48節)

皆さん、こんばんは。

私は今年の3月末日に同志社大学を定年退職いたしました。退社式がこの神学館礼拝堂で行われたのが半年前ですが、いまや懐かしい思い出です。私は30歳の時に入社して以来40年間を同志社大学で過ごしてきました。我が人生の半分以上を転職もせずに働き続け、つつがない生活を送ることができたことはありがたい限りです。今振り返ってみますと、人生70年は瞬く間に過ぎ去ってしまったような感じがします。そんなわけで、長かったような短かったような我が人生で経験してきたことをベースにして、自分の考えやメッセージを若い人に伝えられる年齢になったのではないかなと思う昨今です。

間違った言葉の解釈

さて、前置きはこのぐらいいして、本題に入りたいと思います。

私は日本人で、言うまでもなく日本語を話しています。この日本語には漢字と仮名があり、皆さんご存知のように漢字は表意文字、仮名は表音文字です。そのため、漢字で表される日本語には意味があります。ところが、この日本語には間違った使い方や難しい言葉の解釈、都合のよい解釈が見受けられることがしばしばあります。まず、間違った解釈としてよく例に挙げられるのが、「情けは人の為ならず」という言葉です。これは、「人に情けをかけておけば、めぐりめぐって自分によい報いが来る」というのが本来の意味です。すなわち、人に親切にしておけば、必ず自分の為になるといった因果応報の考え方です。ところが、間違った解釈として、「人に情けをかけるとその人の自立の妨げになり、為にならない」という意味で使われることがあります。自分の為ではなく、他人の為という正反対の間違った使い方です。

もう一つ例を挙げますと、「姑息な手段」という言葉があります。この正しい意味を知っている人は意外に少なく、むしろ「卑怯な汚いやり方」の意味だと思っている人が大勢います。「姑息」の「姑」は「しゅ」とめ」という漢字ですが、この漢字は「しばらく」の意味で、「姑息な手段」とは「その場逃れのやり方」、

すなわち、「応急手当」が本来の使い方であって、悪いイメージで語られる言葉ではありません。

難しい言葉の解釈

次に、難しい言葉の解釈、さまざまな言葉の解釈に出会う場合があります。本日のチャペル・アワーを主催されているキリスト教文化センターから『チャペル・アワー奨励集』の小冊子を送っていただきました。その奨励集を読ませていただいたのですが、スピーカーは聖職者の方が多いようです。そして、ほとんどの方々は聖書の一部分を題材に取り上げてお話しされています。「なるほど、こんなに深い意味があるのだ」と思いつつ読ませていただきました。聖書と同様に、日本の仏教書にも含蓄のある言葉があり、その解釈が難しいものもあります。その一つとして「善人猶以て往生を遂ぐ、況んや悪人をや」という浄土真宗の開祖・親鸞上人の言葉もそうですね。これは親鸞上人の言葉を弟子の唯円が編集した『歎異抄』という語録に掲載されていますが、いわゆる「悪人正機説」のことです。私が中学生時代に国語の時間に初めて教わった言葉でした。国語の先生は熱心に教えてくださったのですが、そのときは悪人正機説について充分理解することもなく、ただいろいろな解釈があり奥深い難解な言葉だということだけが記憶に残っています。

ところで、聖書のマタイによる福音書5章45節に、「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」という一節がありますが、この言葉も親鸞上人の悪人正機説に通底するところがあるのではないのでしょうか。宗教は違っていても根本の考え方は同じだという気がします。

都合よく解釈する言葉

難しい言葉の解釈と共に、自分に都合よく解釈される言葉もあります。

高校の日本史の教科書に記述されていたことですが、日本の宗教改革は鎌倉時代に起こりました。その記述では、臨済宗や曹洞宗などの禅宗は「自力本願」で、日蓮宗や浄土宗などは「他力本願」の仏教であるとして区別されています。禅宗では座禅を組んだり、日々の作務（掃除や草むしりなどの作業）は悟りを得る道として非常に厳しい修行であると理解されています。それに対して、浄土宗や浄土真宗はただひたすら「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えるだけで仏の世界に行けるという教え、専修念仏の教えです。そのため、禅宗よりもはるかに簡単な方法に思えます。

それが転じて、日常の会話で「他力本願」を口に出す人がいます。ほとんどの場合、都合のよい時だけの人任せ、他人の力をあてにする安易な気持ちで使われています。しかし、本来の「他力本願」は「自力本願」と同じく難しい行為だそうです。親鸞上人は自分の師と仰ぐ浄土宗の開祖・法然上人に帰依し、彼の唱えることはすべて正しいとして信じ切ったと聞いています。すなわち、都合のよいところだけ頼るのではなく、信じる人にすべてを委ねることが「他力本願」の本来の意味であり、それは本当に生半可な気持ちでできる行為ではありません。相手を完全に信頼しなければ、信じ切る境地には入れません。

仏教の「他力本願」と同じように、都合よく使われる言葉があります。それは「汝の敵を愛せよ」という言葉です。出典は新約聖書のマタイによる福音書5章、もしくは、ルカによる福音書6章です。『故事ことわざ辞典』によると、「自分の敵は憎むものだ」という世間の常識に対して、イエス・キリストは『自分を愛して

くれる人を愛することは、誰にでもできる。悪意をもって自分を迫害する者にこそ、慈愛をもって接しなければならない』と戒めた」という解釈が記載されています（<http://kotowaza-allguide.com/na/nanjinotekiwoaiseyo.html>）。

ところが、慈愛の精神もなく突然の変節や裏切り行為、背信行為をする人が、しばしば言い訳に使ったり自らの行為を正当化するためにこの言葉を持ち出したりします。本当にそうなのでしょうか。私はこの言葉を使う時には相当な覚悟をもつべきで、安易に口にすべきではないと思っています。それでは、一体どのような覚悟が求められているのでしょうか。

裏切り行為と言われなくために

まず第一に、汝が敵と思っている人が本当に敵なのかよくよく考えねばならない、愛すべき人まで敵と見なしていないかよくよく考えねばならないということです。汝の敵を愛せよ、すなわち、敵対する立場から愛する立場に変わる場合、なぜその人を愛するようになったかの理由を、それまで自分をサポートしてきた人に対して説明する責任があります。十分に熟慮し、意を尽くし、味方を真摯に説得することができて初めて敵方を愛することになります。軽い気持ちで、オセロ・ゲームのように簡単に白から黒に変わることは、味方に対する裏切り行為でしかありません。

第二に、汝の敵を愛することは、自らの信念や行動を厳しく律する人が覚悟をもってする行為です。自らの利益のため、私利私欲のために行う行為であってはなりません。崇高な目標への導きとか至高な志にもとづいた行為でなければなりません。

本当に汝の敵を愛せる人は、普段から信頼される人でなければなりません。信頼されない人が実行すると、それは聖書で説く真の愛する行為ではなく、単なる心変わり、変節行為にしすぎません。それゆえに、信頼されるような人になるためには、その人の生き方、生き様が問われていると言っても過言ではありません。

私の好きな作家の一人に井上靖がいます。『しろばんば』や『天平の薨』などの小説を書っていますが、その彼に『孔子』という作品があります。その中の一節に、孔子が弟子たちと共に自分の志について語り合う場面が描かれています。その時に孔子が披露した「己が志」について述べています。その大意は、老人には安心され、友だちには信ぜられ、幼い者には慕われる、そんな人間になりたい、と。すなわち、孔子にとっては、先輩からは安心して仕事を任せられ、同輩からは信用され、後輩からは敬愛される人になることが自分の志、心の目指すところになるのでしょう。私はその箇所を読んだ時、今まで自分が何となく漠然と思っていたことが、はっきりした形で自分の心の中に「すんと」入ってきました。そして、その「己が志」を実行するためには「信頼」という心掛けが必要不可欠になってくるのではないのでしょうか。

若い人へのメッセージ

そこで最後に、私は若い人に対して「信頼される人になれ」というメッセージを送りたいと思います。そして、信頼される人になるためには、普段からの言動が重要になってきます。一朝一夕で信頼が得られるものではありません。日々の誠実な生き方が信頼・信用を醸成してくれます。まさに生き方、生き様の問題です。

繰り返しますが、孔子の「己が志」を実践するための基本は信頼・信用です。そのためには、日々の誠実な生き方が大切で、それが信頼・信用を生み出してくれます。これがあることによって、汝の敵を愛する立場になった時、あるいは、今まで敵対してきた人を受け入れる時、その行為を人々は納得してくれるでしょう。私が 70 年生きてきて人から信頼・信用される人になったかどうかは分かりません。それは第三者が決めることですが、常日頃から心掛けて生きてきたつもりです。皆さんも「信頼・信用」をモットーに生きていただきたいと思います。

2016年10月11日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録